

年頭にあたって～稲盛経営哲学に学ぶ～

「徳」に基づく経営

「権力によって人間を管理し、または金銭によって人間の欲望をそそるような経営が長続きするはずはありません。一時的に成功を収めることができたとしても、いつか人心の離反を招き、必ず破滅に至るはずで、企業経営とは永遠に繁栄をめざすものでなければならず、それには「徳」に基づく経営を進めるしか方法はないのです。」
稲盛 和夫著「一日一言」より

令和6(2024)年の年頭にあたり、あらためて稲盛和夫さんの箴言を取り上げさせていただきます。稲盛さんは、経営や人生に関する数々の箴言を残されていますが、個人的には、この箴言は、「平成の経営の神様」と言われた稲盛さんの経営哲学の神髄を代表するものの一つではないかと考えています。

この「徳」という日本語については、儒教などの東洋思想だけでなく、ギリシャ哲学やキリスト教などの西洋思想においても、重要な哲学的な概念を含んだものとなっていますが、一般的には、「精神の修養によってその身に得たすぐれた品性」(デジタル大辞泉)と理解されているのではないのでしょうか。残念ながらこのような「徳」を持っていない私としては、「徳に基づく経営」とは、「社会的公正や正義に基づく経営」というふうに理解したいと思います。

こうした経営については、我が国において、古くから語り継がれているものがあり、例として「近江商人の商売十訓」をあげたいと思います。近江商人と言えば、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」でよく知られています。その元となったのが、この「十訓」です。その「一」に、「商売は世のため、人のための奉仕にして、利益はその当然の報酬なり」とあり、この考えを分かりやすく言い換えたものとされているようです。これは、個人的な見解ですが、「商う」は、「贖う」という言葉と語源が同じという説もあるようなので、我が国の「商い」には、互惠の精神が元々あったのかもしれない。

ちなみに、最近、「ESG投資」という言葉をよく目にします。これは、Environment(環境)、Social(社会)、Governance(企業統治)の頭文字をつなげたもので、企業への投資にあたって、環境や社会に配慮した事業が行われ、企業の統治が適切になされている点を重視することです。ひと頃の新自由主義的な市場重視、利潤追求の潮流とは異なるものですが、SDGsの推進等が叫ばれる今日の時代状況に鑑みれば、当然の方向性であり、時代を超えた稲盛さんの経営哲学や「三方よし」の思想と根本的な部分で相通ずるところがあり、あらためて先人の偉大さを感じざるを得ません。

さて、去年は、有名企業の不祥事が次々と明るみに出て、世間の耳目を大いに集めただけでなく、社会や経済にも大きな影響を及ぼしました。こうした事案を見るにつけ、稲盛さんの唱える『「徳」に基づく経営』の持つ意味合いや、いつの時代も守るべき経営者としての本分などについて、深く考えさせられ、年頭にあたって、あらためて冒頭の箴言を胸に、当財団の運営にあたりたいと考えているところです。

最後になりましたが、元日に発生した能登半島地震でお亡くなりになった方々に哀悼の誠を捧げるとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

令和6(2024)年1月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明